

みとりながら 生と死学ぶ

在宅ホスピスの「デスカンファ」

いのちをぜんぶ使い切るって、何だろう。とても幸せな感じがするが、病院という「安全優先」の場所では難しいのかもしれない。甲府市の在宅ホスピス医師、内藤いづみさん(62)は20年以上、「使い切る」ことを模索してきた。簡単ではない。でも、家族らの支える意思と医療・介護側の理解があれば可能なのだと、現場で学んだ。



遺影の前にして、遺族と医療・介護の関係者が集う。いい「送り出し」ができた充実感が漂った—2017年9月、滝野隆浩撮影

甲府市その二戸建ては、甲府市にその二戸建ては、た。車に乗せてもらって、末上山公一さん(69)の親が50年前に中古で買ったという。沈み込む廊下を通って居間に入ると、電気式ロウソクの台の向こうに、母、たみ志さんの遺影があった。笑顔がそっくり。看護師3人とケアマネジャーが次々と集まってくる。「ごめん、ごめん」。最後が内藤先生だった。

「この2年ほど、在宅ホスピスのことを知りたくて、私はこの分野の先駆者である内藤先生の「追っかけ」をししてきた。医療現場の「カンファレンス」なら、関わっているスタッフの情報共有のためにされることは少しは知っている。

でも「デス(死)」がつくと、どうなるのだろう。反省会のようなものか。「行きます」と言う、甲府市の住所と集合時刻だけ告げられた。

たみ志さんは10日前に、遺影のあるこの部屋のベッドで亡くなったという。享年94。公一さんは数カ月間、ベッドの横で寝泊まりして母の最期に寄り添った。「大変だったねー」「よく頑張ったよ」。看護師に声をかけられ、公一さんは、母の思い出や自宅での「みとり」にたとり着くまでの経緯を話し始めた……。



「師匠と仰ぐ故・永六輔さん(右)からは何度も声をかけてもらい、対談もした。内藤医師提供

母は終戦後、甲府盆地で取れた野菜を抱えて東京に行き、自転車で行商していた。だから足腰が強く、父が亡くなってから20年以上も、ひとり暮らしができたのだと思う。亡くなる数日前まで、トイレも自分で行けた。認知症が少し出てきて、息子は時々隣県から様子を見に来ていたが、母は4月に大病院で検査を受けて、脾臓がんと肝臓がんが見つかる。検査の医師が「ごりゃー、あと2、3カ月ですわね」と、笑いながら言った。コノヤローと内心思う。

病院でできることはもうないらしい。家で緩和ケアをしてもらえるところを探し回って内藤先生にたどり着いた。自宅を2世帯住宅に改築する時期と重なり、公一さんは決めた。母と最期を過ごす。愛想のいい母は、病院で「いい顔」を作っていた。息子にはわかった。でも、家に戻って本当の笑顔になった。たぶん、訪問看護師が普通に関わったから。聞いたことのない昔話が、どんどん出てきた。息子は「在宅ホスピスケアハンドブック」をむさぼり読む。死に向かう体の変化、呼吸が弱くなるプロセス。弱っているのに、なぜ筋力トレーニングみたいなききをするのか……。わからないことだらけだった。そのうえ24時間、付き添うのはつらい。ふらふらになった。もう無理だと何度か思ったが、看護師から励まされて踏みとどまった。

ある日、夜中の2時ごろに母は、ぱっと跳び起きて「みんな来てる」と言い始めた。死んだ父の名を呼び、祖母に呼びかけた。このこともハンドブックにあり、「そのまま受け入れて」と書かれていた。もうすぐかも、と覚悟した。その日……。内藤先生が数時間前に来て、血圧を測りながら、母の耳元で「よく頑張ったね、もういいよ」と言ってくれた。夜、弟が来て、久しぶりに刺し身を食べて、うとうとしていたら、弟が「あれ、息してないよ」と気づいて……。

内藤先生は、クリニックを構える甲府市と同じ山梨県の南部、六郷町(現・市川三郷町)の出身。本ばかり読んでいた文学少女だったのに、「人と向き合う医師という仕事がしたい」と、大学は医学部を目指した。1986年、学生時代に知り合った英国人と結婚し、夫の仕事の都合で渡英。そこでホスピス運動のことを知る。「現代ホスピスの母」と呼ばれるシリル・ソングに会い、直接話を聞くこともできた。「ホスピスは建物ではありません。人を支える哲学です。ソングから聞いたその言葉は宝物だ。「治す医療」から見放された患者の心と体の苦痛を取り除き、その家族を支えるのが自分の使命だと信じた。そのあと家族で帰国し、95年に甲府市で開業した。保守的な土地柄の山梨では、偏見との闘いだっただろう。「病院が一番」という意識が根強く、親戚が突然出てきて、「家で最期を」と決めたことに猛反対することもあった。「ドクター・デス」と言われて、悔しくて泣いた。そのとき慰めてくれたのが、親しくしていた故・永六輔さんだった。「あなたほど、明るく死を語る人はいない。在宅ホスピスという分野は、いのちを学ぶ重要な取り組みだよ」。そう、みとりながら、いのちを学ぶのだ。この言葉も内藤先生の宝物になった。たみ志さんは最後の2カ月間、点滴だけで何も口にできなかった。それでも、オシッコもウンコも出た。自分の力を使い切った、燃やし切ったのだ。病院では、静かに見守るだけというのは、まずありえないと思う。遺影を前にして語り合うことで、みんなが死の実相を学んだ。「下の世話までやれたし、いい勉強をさせてもらいました」。そう話す公一さんに死亡診断書を渡しながら、内藤先生はこう言った。「はいこれ、卒業証書よ!」

次回9月23日掲載
デジタルプラス
詳報



初めての息をし、最後の息をひきとる。内藤先生は「誕生」と「みとり」をセットのテーマにして講演した。新潟市で

新潟市で12月上旬、「日本死の臨床研究会」の年次大会が開かれた。緩和病棟やホスピスなどで働く医師や看護師、ケアスタッフが、人生最後の医療やみとの意義を確認し、実践報告で学び合う。ここ数年ずっと参加してきたが、現場での苦悩の報告を聞いて泣き、前向きに患者にかかわる姿勢に感動もした。もちろん報告者はプロだから、涙とは無縁だと思っただけだ。

今回のテーマは「ひ

らかれた看取りをすべ

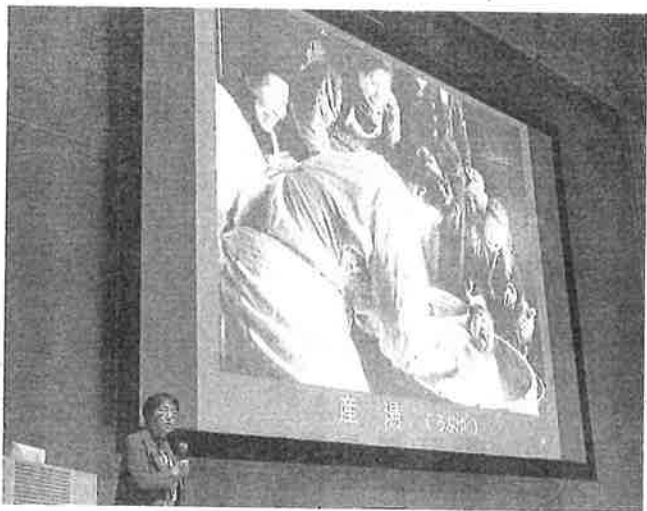
「誕生」と「みとり」

今回のテーマは「ひらかれた看取りをすべ

を自覚し、発信してい

甲府市の在宅ホスピ

家族いる自分の家で



生活があって、医者や看護師を「お客さん」として迎え入れたい。医療者と同じく時間も、自分がいい。そこにはみんながいるから。病院や産院では、家族やゆかりのある人が見守ったり声をかけた

甲府市の在宅ホスピス医、内藤いづみ先生は「産声を上げる時、息を引き取る時に耳を澄ませて向かい合う」

次回回は1月11日掲載